

第3章 虚劳からの回生

遺伝子治療で虚劳から回生できるか

現代医学には虚劳という用語はない。生命力の落ち込みに対してはもっぱら栄養補給で対処している。貧血がひどいときは輸血でということになる。

近年は生命科学の進歩が目覚ましく、ヒトゲノム（人間の全遺伝子情報）の解読が終わったという。人の基本設計図であるヒトゲノムには、人が受精卵として生命が芽生えてから死に至る生老病死の情報がすべて記されている。二十世紀後半から目覚ましい進歩を遂げた生命科学の集大成といえる。これを土台に今世紀には病気の予防や診断、治療に新たな医療の世界が開かれるという。

思えば百年ほど前までは生命に対する人間のコントロールはほとんど及ばなかった。それがいまや、善し悪しは別にして、体外受精など生殖技術の進歩で出生は人為の及ぶところとなり、臓器の移植、さらに遺伝子治療と、生命のコントロールまでできるかに思われ

るようになった。老化制御の実際も夢でなくなるという。

しかし、「しかし……」なのである。こうしてミクロの次元で生命をとらえたとしても、前述の如き生命をつくり立てている量子の次元は、遺伝子よりもさらに微小の世界である。それがしかも、大自然というマクロの世界とひとつらなりの存在となると、これはもう不可思議の世界である。ヒトゲノムの解説は終わったというが、生命についての知見はせいぜい五パーセントといわれている。これを以て虚勞に対処できるだろうか？

そもそも二重の螺旋状の遺伝子に、四つの記号で遺伝子情報を書き記したのは、一体何者なのか？ 一つの受精卵から精緻な人体各部を形成していく細胞の分化を統御しているのは一体何者なのか？

ことほど左様に、ヒトゲノムの解説は遺伝子の姿すがたかたち形は*い*われても、その遺伝子を動かす、遺伝子を遺伝子たらしめているもの、肝腎の原動力には触れていないのである。生命活動のあるところ、必ずエネルギーの付与がある。遺伝子とて決して例外ではないのである。

すべて生命活動のエネルギーは宇宙の燃ゆる星——恒星から発せられているということ、新しい量子力学の教うるところである。となると、生命の探究はヒトゲノムの解説と

いうミクロの視点からだけでは偏りがある。生命エネルギーの発信源である宇宙というマクロの視点からも見きわめていかなければならないのである。

このことは、量子力学がはじめは素粒子という極微の世界の探究から始まって、その素粒子の秒速二十万キロという想像を絶する回転のエネルギーは一体何処から来ているのかということに直面したとき、それは宇宙の燃ゆる星——恒星から発せられているということが分かつて、究理の矛先はついに宇宙という広大無辺の世界に向けられていったのと軌を一にする。

こうしたことから、虚劳に対処するには、遺伝子を操作するということもさることながら、その遺伝子を在らしめているもの、動かしているもの、エネルギーのほうに目を向けるべきではないだろうか。そのエネルギーとは、いうまでもなく宇宙の燃ゆる星——私たち地球人にとって一番身近なのは太陽から発せられている光のエネルギー——大いなる陽である。

早くも遺伝子組み換え食品なるものが出廻っている。これは作物を作り出すのに都合のよい遺伝子を用いて品種改良したものである。ところが人々はそうした食品を口にすることを避けている。だから近頃の食品には遺伝子組み換え食品でないことの断り表示がして

ある。

折角の品種改良食品を人はなぜ避けるのか？ 本能がそうさせるのである。これは放つてはおけない。本能とは動物が生まれつき持っている予知能力である。この場合どんな予知能力が発揮されているのだろうか。

それは、植物であれ動物であれ生命をそこまで踏み込んで、そこまでいじくっていいものかという疑問と、そんなことをしたら自然の仕組みからしつべ返しがえを受けるのでは、そして取り返しのつかないことになるのではないか？ という不安である。

遺伝子操作によって生まれたクローン羊や牛の極端に短命なことが知られている。また、免疫不全の子供たちに行つた遺伝子治療での白血病の多発など、すでに答えが出ているのである。

遺伝子は善玉と悪玉とがあるが、それらがごちゃ混ぜになつてはじめてヒトという種が保たれているのではないだろうか。そう思うのが妥当である。生物界で無意味な存在はないといわれているのだから……。

虚勞という生命力の落ち込みから人を回生させるには、栄養補給や輸血といったこれまでの方法に、遺伝子の操作という生命科学の最先端の技術をもつてしても、決め手にはな

らないと言えるのである。

翻つて、漢方には虚劳を補うための補陽の剤が、容体に応じて幾多の種類が用意されているから、時間的に余裕があれば、虚劳からの回生に大いに役立つ。しかしながら、一日も早く虚劳の状態から脱け出たいときや、いのちの危うき亡陽のときの救命・救急には、即効性に欠けるから間に合わない。

こうして見ると、現代医学にしても東洋医学にしても、多くの人に身近にある虚劳に対処するのに、一丈不足と言わざるを得ないのである。そこで、生命素の相補的医療が、その効果の的確なこと、即効すること、虚劳からの回生に決め手となることは間違いないのである。

